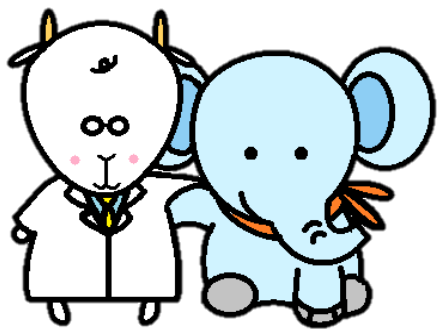




発達性協調運動症（DCD）の 支援に役立つカウンセリング



西明石カウンセリングオフィス



発達性協調運動症（DCD）



一言でいうと「**不器用**」なことです。

歩く、走る、スポーツに参加する、食事をとる、靴紐を結ぶ、物をつかむ、ハサミや刃物を使う、書く、自転車に乗るなどの、運動機能の発達が円滑でないとき、発達性協調運動症の可能性が考えられます。

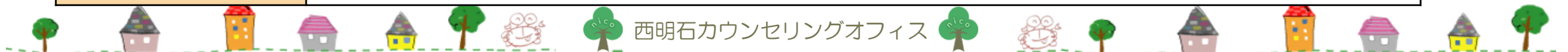
失敗体験が積み重なると、自己肯定感の低下にも繋がります。

発症：発達段階早期、5歳以降に気付かれやすいです。



場面ごとにみられる不器用の例

運動面	縄跳びが跳べない、ボールをキャッチできない、ドリブルしながら走れない、腹筋ができない、坂道の下り坂で踏ん張れない
学習面	筆圧の入れ方、消しゴムの力加減、楽器や器具の操作、実験に時間がかかる
食事面	箸を上手く使えない、座位が保てない、肘をついてしまう、スプーンや箸を使うときに薬指や小指が伸びきってしまう、硬さの異なるものの混ざった料理は咀嚼が困難
生活面	衣服の着脱（ボタン、靴紐、靴下、ネクタイ） 買い物（財布からお金を出す） 家事（洗濯のつまみ洗い、雑巾絞り、盛り付け、テープ貼り、紐結び）が困難



対応

◎取り組みやすい課題から成功に繋げていく

子ども自身の潜在力と周囲の指導によって発達を遂げていきます。少しずつ無理のない課題から始め、できたときは褒め、励ましながら成功体験へと繋げていくことが大切です。

例)

- ・ 右手と左手を別々に動かす練習
- ・ 的を遠くにしたり、近くしたりしてボールで当てる練習
- ・ 強く投げないと倒れない的や弱く投げないと倒れない的を使った力加減の練習 など



対応

◆ 作業療法

運動の困難さに対しては、適切で丁寧な指導が必要といわれています。それぞれの困難さに合った介入をします。

◆ 薬物療法

必要に応じてお薬を検討します。

早期発見、早期対応が大切

本人の過ごしやすさに繋がります

早期発見、早期対応で不器用さを少しでも改善することができるよう、日頃から取り組みにくさがないかなど観察するようにしましょう。



関わりのポイント

- 本人の挑戦しようとする気持ちを労いながら、難しさやつらさを汲む。（**わざとやっているわけではないこと、一生懸命やっている**ことの理解が大切）
- 様子を観察し、どこでつまづいているのかを発見する。
- 本人が取り組める作業から始め、粘り強く励ましながら成功に繋げる。（具体的なやり方を示す）
- 担任、養護教諭、スクールカウンセラーなどと情報共有し、苦手とする子がいる事を、校内で共通理解する。また、安心して取り組める環境作りを検討する。

本人の力を引き出すような
働きかけをしましょう



カウンセリングでできる支援

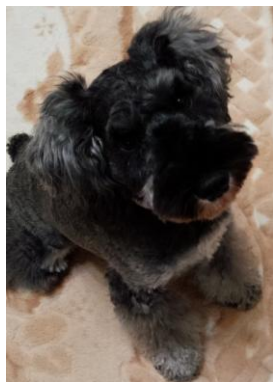
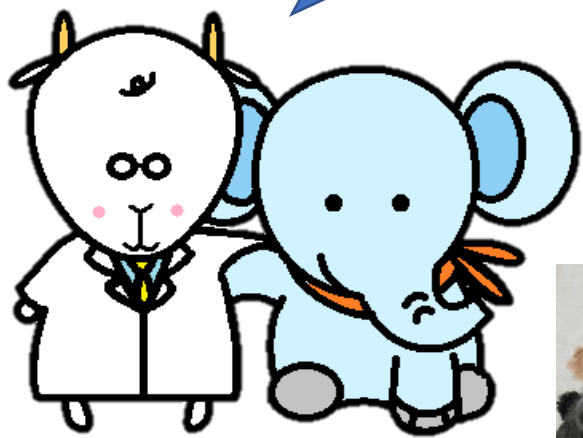


発達性協調運動症の子どものカウンセリング

- お話を丁寧にかがいがいながら、抱えている不安や理解されないことのつらさ、失敗体験や傷つき体験などの気持ちに寄り添います。
- 上手くできないことや難しいことがあっても、それは本人のせいではないことを伝え、できる対策を一緒に考えていきます。
- できるようになったことや頑張っていることに目を向け、取り組みの過程や成長を共有しながら労っていきます。
- 保護者や学校と連携しながら、学校や家庭が安心して過ごせる場所となるよう、環境調整などの必要な支援を検討することもできます。



シリーズで皆さんの参考になることを
お伝えします。



次回は コミュニケーション症/ コミュニケーション障害について



西明石カウンセリングオフィス

